

立教大学学術推進特別重点資金 (立教SFR)
大学院生研究
2004年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院		文学研究科	比較文明学専攻
指導教員	所属・職名		氏名	
	文学研究科・教授		北山 晴一 印	
自然・人文の別	自然	・ <u>人文</u>	個人・共同の別	<u>個人</u> ・ 共同 名
研究課題	草間彌生の野外彫刻に関する研究			
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	文学研究科・比較文明学専攻・博士後期課程5年		中村 圭美 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	文学研究科・比較文明学専攻・博士後期課程5年		中村 圭美	
研究期間	2004 年度			
研究経費	200 千円			

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

1950年代から世界的に活躍している現代芸術家・草間彌生が野外彫刻や壁画を手がけたのは1990年代以降であり、彼女の長い芸術家生活の中では最近の出来事と位置づけることができる。本研究は、草間の野外彫刻作品を網羅的に研究する、草間芸術のフロンティアに関する数少ない研究の中の一つである。本研究は、Ⅰ 草間の野外彫刻作品(壁画を含む)の鑑賞および分析、Ⅱ 草間の野外彫刻作品の草間の芸術史における位置についての考察、Ⅲ 草間の作品・思想と繋がる思想家・作家と草間との関連性の探求、の三つの領域を中心にして構成される。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[現代芸術] [草間彌生] [野外彫刻]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は以下の三つの領域を中心にして構成される。

- I 草間の野外彫刻作品(壁画を含む)の鑑賞、分析。
- II 草間の野外彫刻作品の草間の芸術史における位置についての考察。
- III 草間の作品・思想と繋がる思想家・作家と草間との関連性の探求。

I 草間の野外彫刻作品は日本国内には11、海外に2、全部で13作品存在する。このうち、私が未見のもので重要と思われるものは、

- ① ポルトガル・リスボンの地下鉄の駅構内に設置された壁画『海』(1998)、
- ② 新潟・妻有トリエンナーレに出品された『花咲ける妻有』(2003)、
- ③ 札幌の芸術の森美術館で開催された展覧会「KUSAMATRIX」において展示された『草間空間』(2004)の三つであった。これら三つを鑑賞することは当研究成立の必要最低条件であった。

① 『海』は、ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見から500年後にあたる1998年にリスボンでEXPO'98が開催され、それに合わせて地下鉄オリエンテ線が開通、万博会場の最寄り駅となった地下鉄駅「オリエンテ」駅では万博からとった「海(The Ocean)」のテーマのもと、駅構内に世界各地から選ばれた著名なアーティストによる11作品(壁画やオブジェ)が設置されたが、それらの中でも最も印象的な作品である。『海』はポルトガル特有のタイルであるアズレージョによって創られている。草間の作品のアズレージョ一枚の大きさは、14cm×14cm。それが縦に20枚、横に46枚、ホームの両側にペアで敷き詰められ、それら全部で一つの絵となっている。アズレージョはさまざまな色を出すことができるが、『海』もカラフルな作品である。印象的なのは、紫まじりの青である。この青が地下鉄構内の暗さとマッチして綺麗に映え宇宙あるいは深海を思わせる。アズレージョは光沢のある素材であり、駅の照明や列車の光を反射して、列車が出入りする時と列車がない時とでその色合いを微妙に変化させる。また、白のタイルが敷き詰められたホームの床にも、草間の作品が照明によって反射して映っている。

② 『花咲ける妻有』は、新潟の山間の村を通る第3セクターほくほく線「松代」駅からすぐのところに設置された。花の部分、葉の部分、おしべめしべの部分など、全体で、10メートル四方の大きさと5メートルの高さをもつ、巨大でカラフルな花の彫刻である。大地からよきよきと地面を這うように葉が生えだし、もうこれ以上開かないというくらいにみごとな花を咲かせており、力強い生命力を感じさせる。

③ 『草間空間』は、最大3メートルほどのさまざまな大きさの約20個の真赤の地に白い水玉模様のオブジェを、美術館のまわりに横たわっている巨大な池とそのまわりの緑の芝生あちこちに点在させた、一群の大彫刻空間である。芝生の上のオブジェは、その形からだら～っと体をゆだねたくなる形状をしており、水に浮かべられたオブジェは、風に吹かれてゆらゆら漂っており、共になだらかでやわらかい曲線が優しい印象を与える。

これら野外彫刻作品に共通するのは、周囲の環境を採り入れながら、草間の世界を増殖させつつ、その空間を新たなものにしていくという点である。草間の作品はどれも強烈な個性を放っている。しかし、周囲との不思議な調和を保っている。むしろ、草間の作品がそこにあることによって、その空間がグレードアップする。また作品自体、たとえば『海』などは、当地のアズレージョをその特性も上手く利用して、新たな草間の世界を切り開いている。そしてそれは、草間の作品製作にかかわる人たちにも言えるのではなからうか。草間の野外彫刻作品は、草間が一人で企画立案し制作し仕上げ売り込むというスタイルではもはやない。どれも企画段階から複数の人がかかわっている。さまざまな人たちの手を経て成る共同制作ともいえるのが野外作品である。かかわった人々をみんな取り込んで、草間の新たな作品が完成していくのである。

II 草間は1950年代から活躍し、とても長いキャリアを持っているが、その草間が野外彫刻作品を制作するようになったのは1990年代に入ってからのことである。だから草間にとって、野外彫刻作品制作は新しい試みであるといえる。野外彫刻作品というのは前述のように、自分がつくりたいからつくってどこかに売りつけるものではなく、どこかから要請があって初めて制作されるものである。いろいろなところから注目され評価されて、はじめて制作が依頼される。近年の草間に対する国内外での評価には目を見張るものがある。2001年には朝日賞を、2003年にはフランス政府から、芸術文化勲章オフィシエを受け、他にも数々の賞を受章している。また、最近では世界中のどこかを探せば必ず草間の展覧会がどこかで開かれているといっても過言ではない。また、画廊などでも草間の作品はとてもよく売れている。このような高い評価により、

研究成果の概要 つづき

草間に野外彫刻作品への依頼もできたのであり、草間にとって新たな制作の場が開かれてきたのである。草間の野外彫刻作品は、草間が評価されるようになってきたことの象徴のようなものなのだ。

では草間は変わったのだろうか。草間の野外彫刻作品には、その大きさからくるインパクトだけではなく、どの作品からも「強さ」や「生命力」といったものを、見るものに与えるという特徴がある。草間の作品には昔から「力強さ」を感じるものが多々あった。しかし色は暗いものを多用していた。一方、野外彫刻作品の色はポップな感じのもので、今までの草間の作品とは野外彫刻作品は少し趣が異なるものなのではないか、と思われなくもない。しかし、こういった草間の新しい部分は、古いものを全く捨て去って新しくなったのではなく、古いものから継承され変化してきたものなのではなからうか。常に再生され生まれ変わったものが、現在の形になっているといえるのではなからうか。

草間の核にあるのは、「強さ」だと私は考えている。この「強さ」というのは、たとえば、ずっと同じことをやり続けていく「強さ」である。水玉や網目のモチーフを用いた作品をつくり続ける「強さ」である。しかし同じモチーフが使われていても、作品として目の前に提示されているものは、常に新しい。常に新たなものを創り続けている。この「強さ」を持ち続けている草間自身の中でも「強さ」は常に再生しているのかもしれない。「草間以外にずっと同じことをしていた人はいなかった」とはある画廊の人の言葉だが、同じことをやり続ける強さ、自分を信じる強さ、そういった強さを人々は草間の作品から感じとり、そして草間の作品が好きだという人を虜にしているのではないか。

その力強さは、人の心を重たくするかもしれないが軽くもする。『花咲ける妻有』は、大地を這うように、そして、天に向かって、力強く咲き誇っている。『海』では、海とも宇宙ともとれるような空間へと広がりを見せている。そのような作品を見ていると、強さとともに希望のような明るいものを、強く生きていく勇気を与えてくれるだろう。

III 作家にして批評家のトリン・T・ミンハは以下のように述べている。「概して私の仕事と私自身を表すとすれば、境界線上で起こるいろいろな出来事であるといえよう」。

「境界」とは何だろうか。境界とは何かと何かの間にあるものであり、その何かと何かのあちら側にもこちら側にも行き来できる場である。何かに完全に所属してしまわない、漂える場であり、だから、何かと出会う場、新たなものを創造しうる場である。

そして草間彌生は、このような境界にいて、境界の作品を創ってきた芸術家といえるのではなからうか。今後、当研究は、トリンやほかにもたとえばソフィ・カルやフィオナ・タン、ニキ・ド・サンファルといった草間に繋がっていく芸術家などの言葉や思想を血肉化しながら、以上の成果を再吟味しつつ論文化を目指す。